拝中だより

学校だより（5月号）
令和元年5月31日
昭島市立　拝島　中学校
昭島市緑町２－２－１２
☎０４２－５４１－１０４０

いじめと命の尊さについて考える

５月２７日（月）の朝礼で、生活指導主任の山口主幹教諭より、いじめと命の尊さについての講話を行いました。教材として「わたしのいもうと」という絵本を用いて、国語科の内田教諭が朗読しました。

わたしのいもうと　　松谷みよ子　文・味戸ケイコ　絵

この子は私の妹。向こうを向いたまま、振り向いてくれないのです。妹の話を聞いてください。今から七年前、私たちはこの町に引っ越してきました。トラックに乗せてもらって、ふざけたりはしゃいだり、アイスキャンディをなめたりしながら、妹は小学校四年生でした。けれど、転校した学校で、あの恐ろしいいじめが始まりました。言葉がおかしいと笑われ、跳び箱ができないといじめられ、クラスの恥さらしとののしられ、臭い、ぶたといわれ、ちっともきたない子じゃないのに、妹が給食を配ると受け取ってくれないというのです。とうとう、誰一人、口をきいてくれなくなりました。ひと月たち、ふた月たち、遠足に行ったときも、妹はひとりぼっちでした。やがて妹は、学校へ行かなくなりました。ごはんも食べず、口もきかず、妹は黙ってどこかを見つめ、お医者さんの手もふりはらうのです。でもその時、妹の体に、つねられたあざがたくさんあるのがわかったのです。妹は痩せ衰え、このままでは命がもたないといわれました。母さんが必死で、固く結んだ唇にスープを流し込み、抱きしめて、抱きしめて、一緒に眠り、子守歌を歌ってようやく妹は、命を取り留めました。そして、毎日がゆっくりと流れ、いじめた子たちは中学生になって、セーラー服で通います。ふざけっこしながら、かばんをふりまわしながら、でも、妹は、ずうっと部屋に閉じこもって本も読みません。音楽も聴きません。黙ってどこかを見ているのです。振り向いてもくれないのです。そしてまた、年月がたち、妹をいじめた子たちは高校生。窓の外を通っていきます。笑いながら、おしゃべりをしながら・・・

この頃、妹は折り紙を折るようになりました。赤い鶴、青い鶴、白い鶴、鶴にうずまって、でも、やっぱり振り向いてはくれないのです。口をきいてくれないのです。母さんは、泣きながら隣の部屋で鶴を折ります。鶴を折っているとあの子の心がわかるような気がするの・・・

ああ、私の家は鶴の家。私は野原を歩きます。草原に座ると、いつの間にか私も鶴を折っているのです。ある日、妹はひっそりと死にました。鶴を手のひらにすくって花と一緒に入れました。妹の話はこれだけです。

生徒たちは真剣に聞き入り、受け止めている様子でした。特に、講話中の「いじめた側は覚えていないけど、いじめられた側は一生忘れない。」という言葉が強く印象に残ったようです。みんなが安心して生活できる学校をみんなで作っていきましょう

絵本の最後のページには妹が書いた手紙の絵が載っていて、次のように書かれています。

私をいじめた人たちは、もう、私を忘れてしまったでしょうね。
遊びたかったのに、勉強したかったのに。